



東北大学

ISSN 0385-7506 Vol. 33, No.2 2008



# 東北大学附属図書館報 木這子

BULLETIN OF  
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

- 木這子(きぼこ)とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子(こけしぼうこ) -

## 目 次

○18世紀の批評研究 ～メタ・インデックスの活用～ ..... 1	○附属図書館オープンキャンパス2008を開催...16
○漱石の貸した本(1) 戒能義重差出 夏目金之助宛葉書に関する覚書 ..... 8	○平成20年度大学図書館職員長期研修 - 印象 深い講義2つ ..... 17
○ご存知ですか? 機関リポジトリ「TOUR」...13	○附属図書館のイメージキャラクターが決定 しました ..... 18
○平成20年度東北大学附属図書館・宮城県図書 館合同企画展「はっぴいさんぼう - 和算の世界へようこそ! - 」 ..... 15	○会 議 ..... 19
	○人事異動 ..... 20
	○編集後記 ..... 20

## 18世紀の批評研究 ～メタ・インデックスの活用～

東北学院大学教授 フリーダー・ゾンダーマン  
学術資源研究公開センター助教 小川知幸 訳



はじめに - 啓蒙主義のヨーロッパ

18世紀のヨーロッパは一般に、「啓蒙主義」の時代として知られています。けれども、このことばが表現しようとしているものは、いつも明確だとはかぎりません。

啓蒙主義ということばを見たり聞いたりすると、わたしたちはまず、啓蒙思想を思い浮かべます。これまでのキリスト教的な世界観と決別して、人間本来の理性の自立をうながさうというものです。人びとはもはや、神に与えられた

ものだからといって、何もかもをうのみにしようとはしませんでした。この世界を認識して改善するために、合理性にもとづいた説明を求めたのです。こうして新しく獲得された知識は、社会のあらゆる部分を覆い尽くすことになりました。だから啓蒙主義といっても、とくに思想や宗教にかぎったことではなく、自然科学や人文科学、経済、芸術、手職などの人間生活のすべての領域にわたるものだったのです。

#### 討論の場としての新聞・雑誌

学識ある人びとは、こうした新しい考えのための公開討論の場として、著書を公刊したり講演をおこなったりしました。また、個人の手紙のやりとりや大学の研究グループ間の通信も、そのような役割を担っていました。新しい考えは文章だけでなく、しばしば模範的な活動というかたちでも公表されています。たとえば農業分野では、お手本となるような改良がおこなわれたり、種苗栽培園が作られたりしました。

このような数々の新しい取り組みは、世界をよりよいものにするのは教育であるという信念に満ちあふれていました。よりよい世界とは、能力ある市民に、より多くの上昇のチャンスがある開かれた社会というほどの意味です。真理や新しい認識といったものは、対話のかたちで批判的に意見をぶつけ合うことで、しだいに広まってゆくものだ。そう人びとは信じていました。

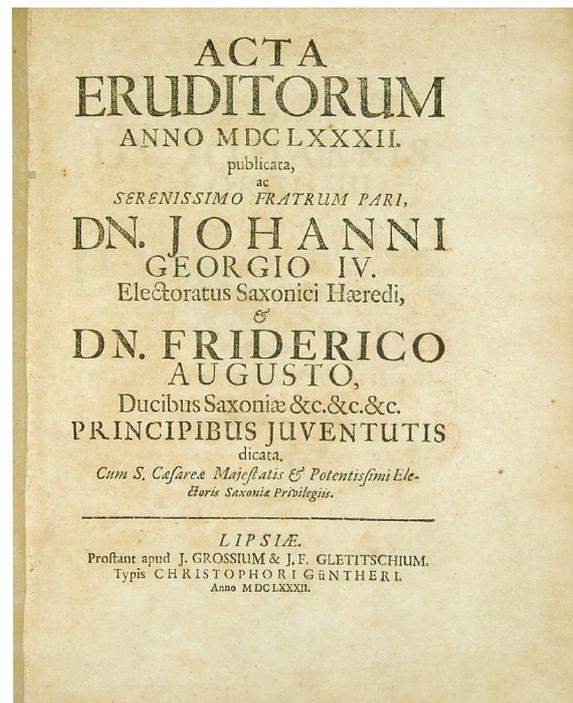
そしてこの公開討論の場は、当時の新聞と雑誌において、もっとも明確に現れることになるのです。

#### 18世紀におけるジャーナル

よく知られているように、現代のドイツでは多くの新聞や雑誌は地方別に発行されています。しかし、数百もの小領邦からできていた「ドイツ民族の神聖ローマ帝国」[16世紀から19世紀にかけてのドイツの正式名称]には、地方で定期的に刊行される、哲学・歴史・文学・自然

科学などの専門別の雑誌は、ほとんどありませんでした。ヨアヒム・キルヒナーは、『1900年までのドイツ語圏の定期刊行物目録』(1969年)を著して、1830年までに刊行されたタイトルを多数挙げていますが<sup>(1)</sup>、この目録にざっと目を通すだけで、そのような専門誌はごくわずかであったことがわかります。

ドイツ語学・文学研究の雑誌については、1927年のカール・ディーシュの目録がスタンダードなものになっています。後にワイマール大学のドリス・クーレスがこれを大幅に拡充しました<sup>(2)</sup>。また、プレーメン大学教授のホルガー・ベニングが指揮を執って、1815年以前のドイツの新聞雑誌を地方別に目録にするプロジェクトがいまも継続中です<sup>(3)</sup>。



最初の学術誌『アクタ・エルディトルム』

#### 資料へのアクセス

しかし、こうした過去の時代の刊行物について目録から知識を得るだけでは十分とはいえません。これらを研究に活用するためには、資料そのものにアクセスする必要があります。以前は、稀少なオリジナルが高価なりプリント版を利用するしかありませんでしたが、ここ数年

で、比較的値段の安いマイクロフィルムが多数作られるようになり、さらに低廉で扱いやすいマイクロフィッシュも続々と出版されるようになりました。[マイクロフィッシュとは、マイクロフィルムの一形態で、A6判のフィルムにおよそ50枚から400枚の文書が微細に焼き込まれたものです。]

最近では pdf ファイルが CD-ROM のかたちで提供されたり、インターネットのデータベースが充実したりして、デジタル・メディアが、しだいに浸透してきています。18世紀の多くの重要な定期刊行物が、素早く、しかも無料でリサーチ可能になったのは喜ばしいことです。

#### メタ・インデックス

ところで、研究を進める場合は、何か特別なテーマについて関心をもって、その史料や背景にある情報を探るのがふつうです。

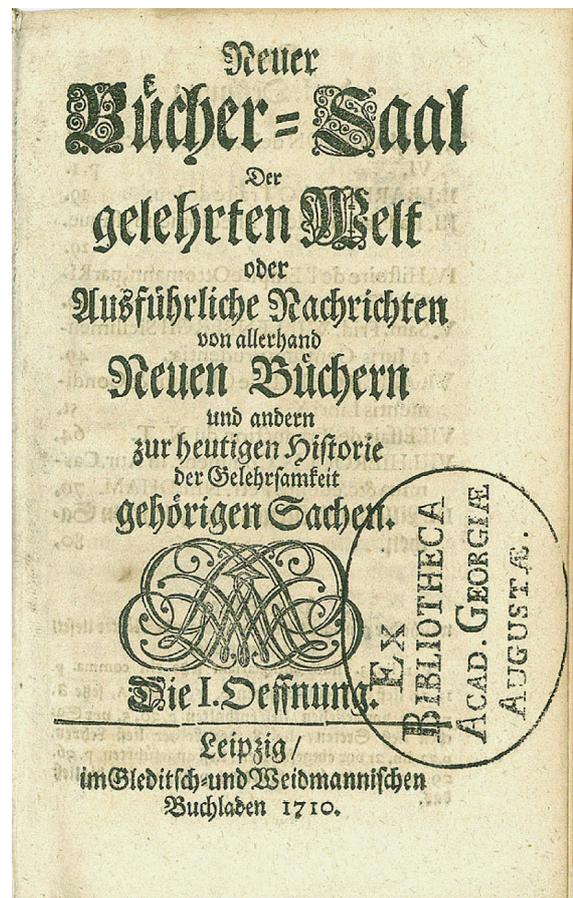
では、ある問題（たとえば、タバコ、死刑、演劇など）に対するその時代の見解や、人物評を知るにはどうすればいいのでしょうか。いったいどの雑誌がそうした問題を論評しているのでしょうか。歴史上の雑誌のとびらを開くためのカギ、それは、できるだけ包括的なインデックス、つまり総記事索引です。もちろん、当時からすでに多くの雑誌は索引を付けていましたし、そうでなければ後の時代に研究者によって作成されています。しかし、メタ・インデックスというものは存在しませんでした。メタ・インデックスの作成は、ようやく最近になって始まったのです。

#### IDZ データベース

そのようなインデックスの前身として、すでに1988年からゲッティンゲン大学・州立図書館では、「作業チームの雑誌記事索引」(Arbeitsstelle Zeitschriftenindex) が作成されていました。ゲッティンゲンは、18世紀の新聞雑誌のもっとも状態のよいコレクションを所蔵しており、全巻が揃っています。最初の作業段階では、

クラウス・シュミットと作業チームによって、主要新聞雑誌195点の記事索引が作成されました。これに15万以上の見出し語を付けて、『1750年から1815年までのドイツ語圏の雑誌記事索引目録』は、1997年に全10巻の書籍として出版されました<sup>(4)</sup>。同時にマイクロフィッシュとしても出版され、2003年には第2版が刊行されています。

この企画は非常に重要なもので、過大評価されるなどということはありません。なぜなら、これによって、きわめて多様なキーワードの埋まっている箇所が迅速に突き止められるようになっただけでなく、その新聞雑誌のうち90点が、ビーレフェルト大学図書館において作られたデータベースに収録されたことで、pdf ファイルとしてオリジナル・テキストが印刷できるようになったからです。このデータベースには、インターネットからもアクセス可能です<sup>(5)</sup>。



ライプニッツ編の学術誌目録（1710年刊）

### エルシュの総合文献目録

さて、この195点の分析が終わると、作業は第2段階に入りました。それは1688年から1784年までの、およそ170点のドイツ語圏の評論誌を「発掘」することです。これらは学術誌とか日刊紙というかたちでカテゴリー化されています。なぜ1784年で区切っているかということ、翌1785年からは、ある歴史的な索引目録によってすでにカバーされていたからです。

ヨハン・ザムエル・エルシュによって執筆された『総合雑誌記事目録』(全8巻)は、まさにパイオニア的な業績でした<sup>(6)</sup>。この目録は、当時の重要な論評誌を体系的に評価して十分に活用することを目標にしていました。しかしながら、その収録期間はおよそ15年と短く、取り上げられた雑誌の数もあまり多くなかったため、大胆な試みではあったのですが、結局は頓挫してしまったのです。

### 『デア・エルシュ』

けれどもエルシュの目録がドイツ精神の歴史にとって画期的な出来事であったことは疑いありません。ベルンにあるヘルベルト・ラング(Herbert Lang)書店は、1969年から翌年にかけて、約1千の独自の典拠を付けてこの目録のリプリント版を出版しました。これは『デア・エルシュ』(Der Ersch)と呼ばれています。いまでも基本的な文献として利用されており、デジタル化されれば、おそらくもっとアクセスしやすいものになるでしょう。

今も昔も論評誌が公開討論の場としてきわめて重要な手段であることは、いまさら繰り返すまでもありません。見本市の目録などとは違い、エルシュは、あらゆる学問領域における新刊書をできるだけ体系的・網羅的に把握することで、目録の利用者が素早くアクチュアルな情報とその評価について概観的な知識を得られるようにしました。かれは重要な書評を参照させるときには、それに善し悪しの評価まで付けています。

もっとも、エルシュは、取り上げた学術誌がたんなる書評誌ではなく、学術的発見や人物評、そして学術機関にかんしてもきわめて有用な情報をもたらすものだということを、いっさい考慮していませんでした。

### ゲッティンゲンのプロジェクト

ともあれ、話を戻して、シュミットの後を継ぎ、ゲッティンゲンにおいてトマス・ハーベル博士が指揮を執って何をなし遂げたかをみていきたいと思います<sup>(7)</sup>。第2段階のお話です。これまでに、新聞雑誌およそ65点を取り上げられ、その中には約7万点の評論が含まれています。どのようにまとめられたのか、簡単に説明しましょう。

まず、エルシュによって用いられた上位カテゴリー(分野)が引き継がれ、さらに以下の17のカテゴリーに分類されました。

1. 学問論
2. 文献学
3. 神学
4. 法学
5. 医学・薬学
6. 哲学
7. 教育学
8. 国家学
9. 軍事
10. 博物学
11. 科学技術・製造法
12. 数学
13. 地理学
14. 歴史
15. 造型芸術・文学・音楽
16. 文学史・学史
17. 雑文献

これらの評論はさらに2千以上の見出し語と下位カテゴリーによって厳密に分類され、探し出しやすいものになっています。もちろん、批評された書物やその著者、出版社にかんする目録も付いています。加えて、評者の名前が判明している場合にはそれも書かれており、評論の収録箇所についての記述もあります。

しかしとくに重要なのは、その評論の内容が紹介されていることです。ハーベルと作業チームは、評論をすべて読んでその中身を評価したのです。



図書館司書でもあったライプニッツ

#### 注目される論文

こうした作業がどのようにして進められたのか、また特殊な出版メディアとしての論評誌の歴史について、何がわかるようになったのか、これらのことをハーベルはふたつの重要な論文のなかで説明しています。

ひとつは、「啓蒙主義期ドイツ語圏の論評誌」という長大な論文です。これは、ペーター・アルプレヒトとホルガー・ベニング編『歴史上の新聞雑誌とその読者』（2005年）という研究書に収録されています<sup>(8)</sup>。インターネットでも入手可能です。

もうひとつは、ハーベル自身の学位論文です。ここでは恐るべき博識が披露されており、出版史の専門家でなくても十分に読む価値があります。この論文は2007年に刊行されました。タイトルは『啓蒙主義期の学術誌と新聞』です<sup>(9)</sup>。ハーベルは、同時代人の証言や例証を資料から

数多く収集し、適切な事例を拾い上げて、書評の光と影の側面を歴史的な文脈から説明しています。歴史上の雑誌とあわせて、現代の同じジャンルの評論誌についても述べており、インデックスのエキスパートであることを身をもって証明しています。

#### データベースの活用

この論文は、多年にわたる地道な研究の成果であり、大きな意義をもっています。これまで、この計画はドイツ学術振興会（DFG）より助成を受け、1997年からはゲッティンゲン科学アカデミーを初めとするドイツのすべてのアカデミーから支援を受けてきました。しかし2008年からは何の資金的援助も受けていないのです。驚くほかありません。そのため計画は中止に追い込まれました。他にどのようなプロジェクトが、18世紀の精神生活をこれほど広く詳細に、専門横断的に把握できるというのでしょうか。

将来的な可能性が期待されるのは、インターネットでしょう。幸いなことに、プロジェクトの中断前に、それまでの成果がデータベースとして公開されています<sup>(10)</sup>。

かつては、「手にとってお読みください」と言われていました。でもいまでは、こう言われます。「クリックして、お読みください」と。

#### おわりに

18世紀のような重要な時代に、さまざまな意見がいわば多声合唱のように響き合っていたことを知るということは、まさにその時代の精神生活と意見形成のプロセスをかいま見ることでもあります。たとえば「Japan」というキーワードで検索してみましよう。すると54件の検索結果が得られます。そのなかにはエンゲルベルト・ケンペルの有名な『日本誌』、シャルルヴォアの『総説日本史』、トゥンベリのスウェーデン語による日本の貨幣論、ラクスマンとカラムジンによって伝えられた1792～93年の遣日ロシア使節にかんする報告などの批評が含まれてい

ます。ヨーロッパの人びとはおよそ200年も前から時事的で驚くほど多様な事柄を目にしていました。その情報源はおもに新聞や雑誌であり、

それらは活発な議論のいわば苗床だったのです。

Prof. Dr. Frieder Sondermann



18世紀ドイツ語圏雑誌記事索引目録トップページ

## 解題

F. ゾンダーマン教授は1985年から6年間、東北大学においてドイツ語講師を務めたのち、東北学院大学助教授をへて1998年から現職にあります。専門は18世紀ドイツ文化史。とくに著者から読者への情報伝達に関心をもち、ゲーテ時代のジャーナリズムの役割について研究されています。

18世紀はプレスとよばれる新聞や雑誌のような定期刊行物が登場して、読者層が飛躍的に拡大した時代です。啓蒙思想家と活動家は、このようなメディアを利用して自分たちの考えを社会に広めました。とりわけ教養ある市民は、変わりつつある社会のなかで新しい実用的な情報を求め、また、キリスト教に代わる市民社会の倫理を確立しようとしていました。近代文学の登場も、ちょうどこの頃です。

本稿は、最新の研究を踏まえながら、これから研究を始めようとする学生諸氏のために入門編として

書かれました。欧米の大学図書館では着々と研究環境を整備しています。本館も例外ではありません。身近にあるすぐれた環境をいち早く利用して、充実した大学・研究生活を送っていただけたらと思います。(おがわ・ともゆき)

## 訳註

(1) Joachim Kirchner, *Die Zeitschriften des deutschen Sprachgebietes von den Anfängen bis 1900*, Stuttgart, 1969-1976. この目録は全3冊からなり、その第1巻が、*Die Zeitschriften des deutschen Sprachgebietes von den Anfängen bis 1830*である。

(2) Carl Diesch, *Bibliographie der germanistischen Zeitschriften*, Leipzig, 1927 および Doris Kuhles, *Deutsche literarische Zeitschriften von der*

*Aufklärung bis zur Romantik : Bibliographie der kritischen Literatur von den Anfängen bis 1990*, München, 1994.

( 3 ) その成果としては, Holger Böning, Hartwig Gebhardt, et. al. ( hg. ), *Deutsche Presseforschung. Geschichte, Projekte und Perspektiven eines Forschungsinstituts der Universität Bremen: Nebst einigen Beiträgen zur Bedeutung der historischen Presseforschung*, Bremen, 2004 などがある。

( 4 ) *Index deutschsprachiger Zeitschriften 1750 - 1815* / erstellt durch eine Arbeitsgruppe unter Leitung von Klaus Schmidt, Hildesheim, 1997.

この雑誌記事索引目録 ( 通称 IDZ ) は, 冊子体では慶応大学, 日本大学, 法政大学, マイクロフィッシュでは一橋大学, 東京大学などに所蔵されている。

( 5 ) <http://www.ub.uni-bielefeld.de/diglib/aufklaerung/>

( 6 ) エルシュ ( Johann Samuel Ersch, 1766-1829 ) は, ドイツの書誌学者であり, イエナ大学・ハレ大学の教授を務めた。本文中の総合目録 *Allgemeine Repertorium der Literatur für Jahre 1785 bis 1790, 1791 bis 1795, 1796 bis 1800*, Jena und Weimar, 1793-1807 では, 当該期のあらゆる

定期刊行物の記事を網羅しようとし, また, グルーバー ( J. G. Gruber ) とともに百科全書 *Allgemeine Enzyklopädie der Wissenschaften und Künste*, Leipzig, 1818-1889 を出版した。本館にもリプリント版が所蔵されている。

( 7 ) ゲッティンゲン科学アカデミー主催のプロジェクト, Systematischer Index zu deutschsprachigen Rezensionen-Zeitschriften des 18. Jahrhunderts ( 通称 IdRZ 18 )。ハーベルは2003年からこのプロジェクトの主任を務めた。

( 8 ) Thomas Habel, *Deutschsprachige Rezensionen-Zeitschriften der Aufklärung. Zur Geschichte und Erschließung*, in: Peter Albrecht, Holger Böning ( hg. ), *Historische Presse und ihre Leser: Studien zu Zeitungen und Zeitschriften, Intelligenzblättern und Kalendern in Nordwestdeutschland*, Bremen, 2005.

( 9 ) Thomas Habel, *Gelehrte Journale und Zeitungen der Aufklärung: Zur Entstehung, Entwicklung und Erschließung deutschsprachiger Rezensionen-Zeitschriften des 18. Jahrhunderts*, Bremen, 2007.

( 10 ) <http://idr18.adw-goettingen.gwdg.de/>

## 漱石の貸した本（１）

### 戒能義重差出夏目金之助宛葉書に関する覚書

参考調査係 渡 邊 愛 子

#### はじめ

2008年の2月。遡及入力作業中の小宮文庫<sup>1)</sup>の一冊、ドストエフスキー全集の第一巻『罪と罰』<sup>2)</sup>から、夏目金之助宛の葉書<sup>3)</sup>が発見された。差出人は戒能義重。大正3年4月27日高山局の消印がある。岐阜県立斐太中学校へ赴任の挨拶状であった。

ここに問題が2つ想起される。一つは漱石にこんな葉書を出す戒能とはどんな人物であったのか、漱石とどのような繋がりのあった人物であったのかという点。二つめは何故、漱石宛葉書が小宮文庫から出てくるのか、本来は漱石文庫に収納されるべき資料が存在するのではないか、という点。この稿では一点目の戒能義重の問題を取りあげる。二点目の問題は次稿で報告する。

葉書発見時から参考調査係内で断続的に戒能に関する調査を行い、そのメモは葉書とともに収納されている。しかし将来のためにはメモを脱し、葉書の来歴を公に保存すべきと考えこの稿を起こした。

#### 京城帝国大学を鍵に

『漱石全集』<sup>4)</sup>の索引には戒能という名前は出てこない。従来漱石との関係においては語られることのなかった人物のようである。何も手がかりのない時のレファレンスの常套手段、Googleをまず検索する。ヒットした「京城帝国大学予科について」<sup>5)</sup>という論文から京城帝国大学予科部長であったことが判明した。そこで、OPACで京城帝国大学を検索すると、『紺碧遙かに』<sup>6)</sup>がヒットする。書庫にあったその本には肖像写真も掲載されていた。京城医学専門学校教授から、京城帝国大学予科が設立さ

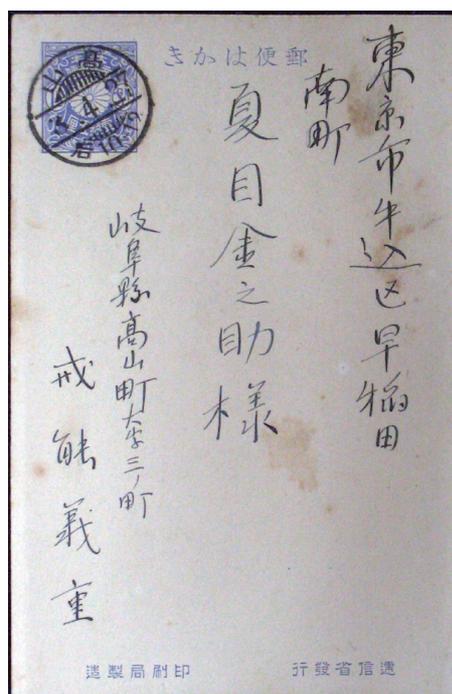


図 夏目金之助宛葉書

れた大正13年5月に教授に任命、昭和2年5月に第二代予科部長に任命され、昭和9年5月12日までその職にあった。

帝国大学と名の付く予科部長に任命されたのであるから、当時のこととして東京帝国大学出身に違いない、との見当をつけ、帝国大学関係の人名録を当たった。大正12年に出版された『帝國大學出身録』<sup>7)</sup>では愛媛県出身であり、明治39年に東大文科英文科を卒業後、斐太中学校長から朝鮮京城中学校教諭となったことが記されていた。

ここで漱石との関係が明らかになった。英文科講師であった漱石の教え子であったのだ。漱石はラフカディオ＝ハーンの後任として、明治36年から東京帝国大学英文学科講師に任ぜられた。同じ年に入学した戒能も漱石のシェイクス

ピア論などを聞いたのであったろう。『帝国大学一覧』<sup>8)</sup>では明治36年度入学者の一覧に「戒能義重 愛媛」とある。同級生には森田米松(草平1881・1949)、留年した小山内薫(1881・1928)等の名前がある。

帝国大学に入学する前の学歴を調査すべく、松山中学校や東京第一高等学校の関係を調べたが成果がなかった。そこで帝大出身者という観点に戻った。『帝国大学出身名鑑』<sup>9)</sup>では『出身録』より詳しい略歴が掲載されていた。松山中学や一高からの進学ではなく、どちらかといえば苦労して学問する姿が浮かび上がった。(詳細は年譜) 調査する私たちが驚いたのはその生年であった。明治4年11月(1871)池内氏次男として生まれた。のちに戒能家の養子となる。英文科で机を並べたであろう漱石門下として知られる小宮豊隆、阿部次郎(1883・1959)等よりも、慶応3年(1867)生まれの漱石とずっと近い年齢であったのだ。『帝国大学一覧』の明治36年度の生徒の平均年齢は25年11ヶ月余となっているから、32歳の戒能は随分年長の同級生であった。

明治27年6月第五高等中学校一部を卒業後、松山の尋常師範学校の嘱託教員<sup>10)</sup>となった。30年には教諭<sup>11)</sup>となり帝大に入学するまで8年ほど英語教師として勤めている。これで帝大以前にも二人の接点があった可能性が出てきた。漱石は明治28年から29年松山中学に在職した。「坊っちゃん」には松山中学と松山師範の確執の場面が描かれている。当時、漱石が戒能を知っていたかはわからない。しかし帝大出身の鳴物入りでやってきた漱石を、同じ英語教員として、戒能は見知っていたのではないだろうか。

#### 没年を探る

人の一生を調べるにはやはり、生年と没年は必須の調査事項であろう。しかし、没年を明らかにすることは、大変難航した。愛媛県関係の人名録等を自館資料、愛媛県立図書館等へのレ

ファレンスで調査したが、この時点では、京城帝国大学予科部長までの略歴がわかる資料しか発見されなかった。学術資源研究公開センター 曾根原助教より学士会「会員氏名録」<sup>12)</sup>からのアドバイスをいただいた。曰く、

史料館で収蔵している昭和12年版では勤務先「松山市北予中学校」(現愛媛県立松山北高等学校)、住所も松山市内となっているが、昭和18年版には記載がない。「逝去会員」の欄(昭和16年11月～18年6月)にも記載がないことから戒能は昭和11年11月～16年10月の間に逝去したのではないかと

「会員氏名録」は該当年の所蔵がないので、他館へ調査を依頼しようとしたところ、会員名簿は「学士会月報」の累積であり、「月報」は所蔵していることがわかった。推定される年代の月報を繰っていくと、ついに昭和15年10月631号逝去欄に昭和15年6月15日に逝去の記事が掲載されていた。<sup>13)</sup>所属は松山高等商業学校(現松山大学)となっていた。

最後のレファレンスは戒能氏新聞死亡記事を探すことであった。「全国新聞総合目録データベース」<sup>14)</sup>から愛媛県で当時発行されていた新聞を捜し、死亡記事の有無を愛媛県立図書館に問い合わせた。「海南新聞」<sup>15)</sup>昭和15年6月16日に掲載との回答があった。複写サービスで取り寄せたそれは、写真入の訃報記事で、朝鮮から帰国後の略歴もほぼ判明するものであった。複写担当者は気がつかなかったようだが、同面下段に戒能家の死亡広告も一緒に写りこんでいた。

没年を調べることに並行して様々の角度からの調査を行った。

漱石に葉書を送った着任先斐太中学校は明治19年に高山中学として発足した学校である。(現岐阜県立斐太高等学校)7代目の校長戒能<sup>16)</sup>は「涙もろく情味の深い方であったが、校規をすっかり肅正する英断を行った。」<sup>17)</sup>

「朝鮮総督府官報」<sup>18)</sup>からアメリカ留学を命じられたことが判明した。「昭和の読売新

聞」<sup>19)</sup>では京城帝国大学を辞すときの閣議決定が検索された。国立公文書館の「公文書データベース」<sup>20)</sup>では昭和に入ってから叙勲の情報が得られた。

本館情報企画係木戸浦係員からは「英語青年」<sup>21)</sup>消息記事に名前が出てきたことを知らされた。昭和14年12月24日、松山で英語懇話会がありジョンズ氏<sup>22)</sup>より発音を習った思い出話をしたことが掲載されている。肩書きは、「高商」とあり、松山高等商業学校で教えていたことがここでも判明した。

また帰国後に勤務していた北予中学校、松山高等商業学校のHPなどでは写真や、名前なども見つけることが出来た。

#### 振り返って

およそ2ヶ月の調査によって戒能義重の一生が復元された。漱石とは松山時代と帝大時代の2度関係があった。帝大卒業後、おそらくは斡旋された就職先の大阪に赴く前に戒能は、師漱石に挨拶に行ったのだろう<sup>23)</sup>。そして転任に当たったの挨拶状が小宮文庫に残された葉書であった。

10年以上も年の離れた同級生達と机を並べた戒能。そして60歳を過ぎてまでも教壇に立ち続けた彼。どのような思いで英文学を学び、40年近い教師生活を続けたのか。漱石に対してはどのような感情をもっていたのか。今回はその肉声を聞けるような資料に行き当たらなかったこと

が残念である。これ以上は、現地調査が必要であり、今は許されない。

調査をして大きく感じたことは「インターネット」の威力であった。新発見！と思っていた漱石宛の葉書であったが、戒能義重探索も終盤にかかった頃、小宮文庫のなかに漱石宛葉書が紛れ込んでいたことは、周知の事実であったことを教えられた。その証拠に「小宮文庫目録」の当該箇所には夏目漱石宛葉書との注記がある。本の輸送に立ち会われた令嬢も当時の受入担当者に葉書を見せていたということだった。しかし、戒能義重があまり有名な人物でもなく、内容も月並みなものであったのでそのままにされた、ということだろう。今回の調査でも最初の「京城大学予科部長」という経歴が出てこなければ、一生を復元することは難しかったであろう。また、各種のデータベースや、近代デジタルライブラリー、いくつかの機関リポジトリ、各学校のHPなどに探索のヒントを教えられた。

また参考調査を依頼した各館担当者にも感謝しなければならない。多くの方が、こちらが依頼した以上に関連した資料を調査し、丁寧な回答を下された。調査担当者として本当に見習うべき態度であると感じられた。

最後に学術資源研究公開センター曾根原助教、情報企画係木戸浦係員の適時適切なアドバイスに感謝したい。

(わたなべ・あいこ)

## 戒能義重年譜

年月日(西暦)	できごと(年齢)
慶応3年(1867)	漱石誕生
明治4年11月(1871)	愛知県旧松山藩土池内義知の次男として生まれる(0)
明治27年6月(1894)	第五高等中学校第一部卒業(23)
明治28年(1895)	愛媛師範学校嘱託教員
明治28年4月	漱石愛媛県尋常中学校嘱託教員(明治29.4まで)
明治30年(1897)	家督相続(26) <sup>24)</sup>
明治36年4月(1903)	漱石東京帝国大学英文科講師(明治40.3まで)
同年9月	東京帝国大学入学(32)
明治39年7月(1906)	東京帝国大学英文科卒業(35)
同年8月	大阪天王寺中学校教諭
明治42年9月(1911)	大阪天王寺中学校教務主任戒能義重教諭が校長代理を務めた(同年11月まで)(40) <sup>25)</sup>
大正3年3月19日(1914)	斐太中学校校長兼教諭(43)
同年4月27日	漱石へ斐太中学校赴任の葉書を送る
大正4年10月(1915)	京城中学校校長兼教諭(44)
大正5年12月9日(1916)	漱石死去

年月日(西暦)	できごと(年齢)
大正10年(1921)	倫敦大学へ留学を命ぜらる(50) <sup>26)</sup>
同年4月18日	「亜米利加合衆國へモ在留ヲ命ス 京城中学校教諭戒能義重」
大正12年(1923)	倫敦大学留学後帰国(英米仏ベルギー等を視察)(52)
このころ	朝鮮總督府嘱託
	元山中学校教諭
	京城医学専門学校教授
大正13年(1924)	京城帝国大学予科教授(53)
昭和2年5月(1927)	京城帝国大学予科部長(56)
昭和9年5月(1934)	京城帝国大学予科部長辞任(63)
同年5月11日	閣議決定「戒能義重 依願免本官」
同年9月	松山市北予中学校嘱託(昭和13.3まで) <sup>27)</sup>
昭和10年10月1日(1935)	松山高等商業学校嘱託講師(英語)就任(64) <sup>28)</sup>
昭和14年12月24日(1939)	英語懇話会 講演 肩書「高商」(68)
昭和15年6月15日(1940)	逝去(69)
同年6月16日	「海南新聞」死亡記事掲載

参考文献および注

- 1) 小宮文庫：5代図書館長小宮豊隆（1884-1966）の旧蔵書。昭和43年度に寄贈。
- 2) Rodion Raskolnikoff : Schuld und Suhne : Roman / F. M. Dostojewski ( Samtliche Werke / F.M. Dostojewski ; unter Mitarbeiterschaft von Dmitri Mereschkowski ; herausgegeben von Moeller van der Bruck ; Abt. 1., Bd. 1-2 ) Munchen : R. Piper, 1908 [ 小宮 IVB11/D6 ]
- 3) この葉書は現在、漱石文庫に収納されている。
- 4) 『漱石全集』夏目金之助著 岩波書店, 1993.12-2004.10. [ 本館書庫 KH426/010 ]
- 5) 稲葉継雄 / 京城帝国大学予科について : 「朝鮮的要素」と「内地の要素」を中心に「九州大学大学院教育学研究紀要」7, 2005.3, p35-49 <https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/bitstream/2324/3667/1/KJ00004167264.pdf>
- 6) 『紺碧遙かに』京城帝国大学創立五十周年記念誌京城帝国大学同窓会, 1974.10, p10 [ 本館書庫 FB22/023 ]
- 7) 『帝國大學出身録』原田登編. 帝國大學出身録編輯所, 1922.4, p414 [ 本館書庫旧片平 IIIB1-3/ハ1 ]
- 8) 『帝國大學一覽』東京帝國大學, 1898.12. [ 本館書庫旧片平 IB2-1/ト3 ]
- 9) 『帝国大学出身名鑑』日本図書センター, 2003.3. ( 帝国大学出身人名辞典 ; 第1巻 ). p22 [ 本館 RC GB12/088 ] 旧姓池田は誤植と考えられる。
- 10) 『職員録』内閣官報局 明治28年版 乙 1895.11.10現在調査, p317 [ 近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/> ] 同ページの尋常中学校欄に囑託教員夏目金之助の名前が見える。
- 11) 『愛媛県師範学校一覽』1900.11, p29 [ 近代デジタルライブラリー ] 戒能義重で記載。
- 12) 「會員氏名録」学士會. [ 史料館 ]
- 13) 「學士會月報」631, 1940.10, p78 [ 本館2号館 ]
- 14) 全国新聞総合目録データベース <http://sinbun.ndl.go.jp/>
- 15) 「海南新聞」原紙 海南新聞社1877-1941 日刊
- 16) 『岐阜県教育五十年史』岐阜県教育会編. 第一書房, 1981.4.( 日本教育史文献集成 ; 第1部. 地方教育史の部 ; 2 ) p355 [ 本館書庫 FB16/047 ]
- 17) 『斐太高校百年史』岐阜県立斐太高等学校, 1986 p119 [ 名古屋大学 ]
- 18) 「朝鮮總督府官報」[ 復刻版 ] / 韓國學文獻研究所. 第2605號 大正10年4月20日 [ 北海道大学 ]
- 19) 「昭和の読売新聞」CD-ROM [ 本館 RC ]
- 20) 国立公文書館デジタルアーカイブ <http://www.digital.archives.go.jp/> 本文は見られない。昭和7年正五位勲四等 『帝国大学出身名鑑』
- 21) 「英語青年」82(9) 1940.2, p284
- 22) 留学時代, 音声学者 Daniel Jones 1881-1967 ( 在ロンドン大1921-1941 ) か ?
- 23) 一級上の金子健二は, 山形県の中学校へ赴任の意向を漱石から聞かれた模様を記録している。『人間漱石』/ 金子健二 いちろ社, 1948.11, p168 [ 本館書庫旧片平 IVB3-1/カ11 ]
- 24) 戒能家の養子となったのがこの時か? 第五中学校卒業時, 10) 『職員録』には池内義重とある。「龍南会雑誌」/ 第五高等学校29, 1894.10, p66 <http://reposit.lib.kumamoto-u.ac.jp/bitstream/2298/4445/1/029-017.pdf>
- 25) 『桃陰百年：大阪府立天王寺高等学校創立100周年記念誌 - 』1996 [ 大阪市立図書館 ]
- 26) 『朝鮮満州南支四國人発展史』1924.1 p172 [ 愛媛県立図書館 ]
- 27) 北豫中學校沿革誌 / 景浦直孝筆. - 北豫中學會, 1940.11, p92 [ 名古屋大学 ].
- 28) 『松山商科大学三十年史』松山商科大学創立三十周年史編集委員会 1953., p85 [ 本館書庫旧片平 IB2-1マ1 ]

URL:2008.8.27確認

# ご存知ですか？ 機関リポジトリ「TOUR」

- Tohoku University Repository -

東北大学機関リポジトリホームページ



<http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/>

どのようなサービス？

東北大学機関リポジトリ“TOUR：Tohoku University Repository”は、本学の学術研究成果及び教育成果を電子媒体で収集し、インターネットを介して広く公開しています。

TOURでは、著者名やタイトルなどの書誌情報だけではなく、著者の理解を得た学術・教育成果の本文を、無償で提供しています。

内容は？

2008年9月時点の種別毎登録件数は、次のとおりです。

- ・ 学術論文：346件
- ・ 博士学位論文：91件
- ・ 博士学位論文の要旨および審査結果の要旨：17,162件
- ・ 修士論文：105件
- ・ 授業等で使用した教材：25件
- ・ 紀要類：9,901件
- ・ 学会等での発表資料など：10件
- ・ レアコレクション：16,989件

以上合計44,629件が登録されており、日々増加中です。

国内・世界の状況は？

国内においては、すでに80以上の大学等でリポジトリを構築しています（NII（国立情報学研究所）機関リポジトリ一覧：<http://www.nii.ac.jp/irp/list/>）

また、海外では1200以上の機関でリポジトリが公開されています（The Directory of Open Access Repositories：<http://www.openoai.org/>）

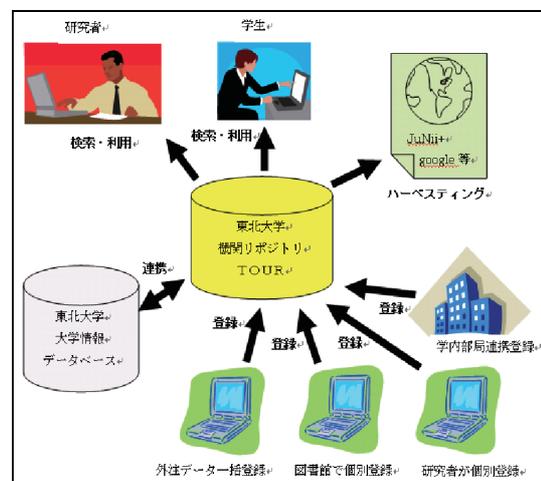
登録の手続きは？

TOURにコンテンツを提供できるのは、原則として本学の構成員です。

登録方法は、図書館へ学内便でCD-ROM等を送付、Eメールで添付ファイルを送付、あるいは、図書館からの登録依頼メールに回答するだけです。（提供者・提供対象コンテンツなどの詳細は、TOURのウェブサイトから「東北大学機関リポジトリ運用指針」をご参照ください。）

ただし学位論文に関しては、各研究科毎に対応が異なりますので、詳細は図書館にお尋ねください。

TOURの概念図



著作権は？

出版社へ投稿した論文も、TOUR に登録できません。登録できる出版社の確認は、次のサイトから参照できます。

- ・国内：学協会著作権ポリシーデータベース

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/scpj/>

- ・海外：SHERPA/RoMEO

<http://www.sherpa.ac.uk/romeo/>

登録のメリットは？

1. 公式サイトからの発信

大学の公式サイトからの公開となり、外部サイト

- ・個人サイトでの公開に比べ信頼性が高まります。

2. 公開の場の提供

授業資料など、従来は積極的に公開されてこなかった資料の公開にも最適です。

3. 閲覧回数の増加

高額な商用電子ジャーナルを利用できない研究者も閲覧でき、投稿論文の引用回数の増加も見込まれます。

4. 成果の保存

大学を異動・退職した後も、在職していた間の成果として、同じ URL で永続的に保存・公開されます。

登録コンテンツの検索は？

登録されたコンテンツは TOUR で検索できるほかに、国内では NII の「Junii+：機関リポジトリポータル」でも検索できます。

Junii+ のホームページ



<http://juniplus.csc.nii.ac.jp/>

また海外ではミシガン大の「OAister」等でも検索可能です。もちろん Google などの検索エンジンでも探すことができます。

OAister のホームページ



<http://www.oaister.org/>

さらにこの10月より、学術論文などの本文コンテンツについては、本学でも契約している NII の「CiNii：論文情報ナビゲータ」から TOUR ヘルリンクされる予定です。

また現在、「東北大学研究者紹介」サイトとの連携も調整しています。

CiNii のホームページ



<http://ci.nii.ac.jp/>

教育・研究成果をもっと広く、もっと遠くへ。TOUR は、本学が所蔵する学術情報コンテンツを収集・整理・保存し、無償公開することによって、学術の発展に貢献しています。

(情報企画係)

## 平成20年度東北大学附属図書館・宮城県図書館合同企画展

「はっぴいさんぼう - 和算の世界へようこそ! -」

今年度の企画展は、平成20年12月の関孝和没後300年に合わせて「和算」をテーマに開催します。

本学にとって和算に関する展示は、平成16年度に続き2回目となりますが、新収の平山文庫を含め、厳選した資料を展示し、自然豊かな宮城県図書館を会場に、高校生でも楽しめる展示会として開催します。

宮城県図書館との共催は、平成18年度に続き2回目となり、地域社会との連携と地域住民への貢献になるものと期待しています。

いささか奇抜な感を与えるかもしれないタイトル「はっぴいさんぼう」は、算聖（数学の聖人）とも称された関孝和の主著『発微算法』（はつびさんぼう、1674年刊）と、「ハッピー」な数学、すなわち楽しく親しみやすい数学の意とを掛け合わせたものです。

どなたでも親しめるような展示となっていますので、楽しみながら、和算の世界をのぞいてみてください。

企画展（入場無料）

会場：宮城県図書館 2 F 展示室

期間：平成20年10月25日（土）～

平成20年11月24日（月）

9：30～17：00

展示概要：

「第1部 といてみよう！ 和算の問題」

高度な問題、パズルのような楽しい問題も、そんな楽しい和算の世界をのぞいてみましょう。

「第2部 のぞいてみよう！ 塵劫記の世界」

遊びのひとつとして楽しむことから、純粋数学まで展開した和算。江戸の数にまつわる話題と初期和算書までを紹介します。

「第3部 ふれてみよう！ 和算家の人生」

己の知的好奇心を糧に、数の世界を楽しんだ多くの和算家たちの残した書を通じて、その生き様にふれていきます。

講演会（入場無料）

会場：宮城県図書館 2 F ホール養賢堂

10月25日（土） 13：30～15：30

講師 遠藤寛子氏（児童文学作家）

「算法少女のなぞ」

11月8日（土） 13：30～16：15

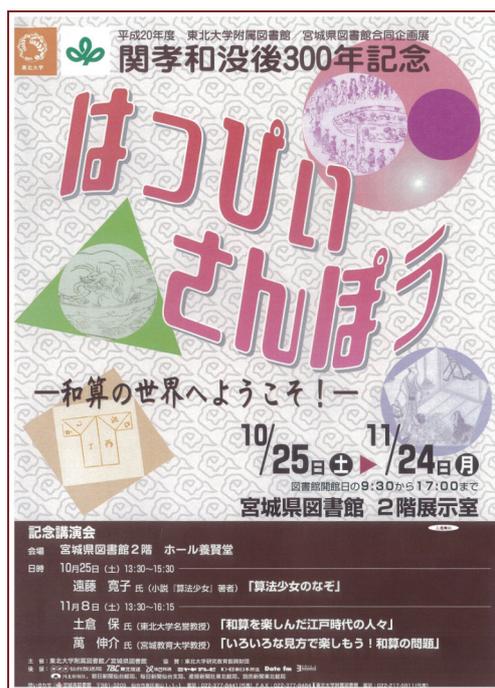
講師 土倉保氏（東北大学名誉教授）

「和算を楽しんだ江戸時代の人々」

講師 萬伸介氏（宮城教育大学教授）

「いろいろな見かたで楽しもう！和算の問題」

（展示WG）



## 附属図書館オープンキャンパス2008を開催

附属図書館では、7月30日（水）、31日（木）の2日間にわたり、「東北大学オープンキャンパス」の一環として、「附属図書館オープンキャンパス2008」を開催いたしました。

附属図書館本館の自由見学のほか、図書館職員による館内ツアー、附属図書館が誇る古典蔵書「狩野文庫」を用いた「江戸の遊び」展などを実施し、高校生をはじめ、ご父兄の方々や

教員の皆さま方にも、大学図書館を実感していただく絶好の機会となりました。図書館の広大さ、蔵書の多さ、古典資料をはじめとする資料の多彩さに、驚きや感嘆の声が寄せられました。

2日間の入場者数は、延べ3,664人となり、盛況のうちに終了することができました。

（情報企画係）

### 附属図書館オープンキャンパス2008の風景



ようこそ！ 附属図書館へ



館内ツアーのようす



説明に熱心に聞き入る高校生



自然に高校生との会話も弾みます



「江戸の遊び」展



特別展示「江戸の妖怪」展

## 平成20年度大学図書館職員長期研修 - 印象深い講義 2 つ

工学分館 整理・運用係 半 澤 智 絵

### 1. 研修の概要

今年度の大学図書館職員長期研修は、平成20年7月7日(月)～18日(金)、会場は筑波大学春日地区で行われた。研修内容は、通り一遍の内容ではなく、工夫が凝らされ、興味深いものだった。担当の方によると、毎年アンケートを採って改善しているという話であった。

意外に不思議だったのは、係長クラス対象の研修だけあって近い年代の人たちばかりだったのだが、その集団を物珍しく感じてしまったことだ。考えてみれば周りが近い年代ばかりというのは大学時代以来のことなので、久しぶりの経験であった。

さて、講義内容は、大きく分けると図書館に関わることと、マネジメントに関わることの2種類であった。前半では主に、討議形式での課題解決シミュレーションや経営学などの図書館が直接関わらないもの、後半は図書館に係る講義を集めるという構成だった。

### 2. 印象深かった講義

参加前に期待していたのは、マネジメント関係の講義である。

係長になってからというもの、実務だけでも目が回っていた上に、それ以外にも係長としての仕事は何かしら必要なのに、その「何か」の要点がよく分からず、困惑の日々を送っていた。

それが「マネジメント」であると分かったのは、民間会社で管理職を務めている知り合いに、マネジメントについての話を聞いてからだ。

実は私は、マネジメントが世間では一般的な事であるにも関わらず、「図書館」や「大学」に所属しているのであまり関係ないと思っていた。

しかし、一旦「マネジメント」を気につけて始めたたん、それが四六時中頭の中を巡るようになった。そのようなわけで、今回の研修で楽しみにしていたのは、マネジメント関係の講義だった。

講義はそれぞれ全て勉強になるものだったが、特に印象に残ったものは、一日目の筑波大理事吉武博通氏による「大学経営の課題」と、最終日の筑波大学宗像恒次教授による「ストレスマネジメント」である。

「大学経営の課題」では、民間出身の理事である吉武氏が見た大学経営の問題や課題が、直接そこに携わっていない者にとっても分かりやすく整理され、よく内容が伝わってきた。大きな枠組みからなされた現状分析では、所属母体として、図書館ではなく「大学」を認識させられた。マネジメントのポイントの解説は、簡単な言葉で述べられたが、非常に刺激的であった。

特に、民間的発想からのマネジメントの5つのポイント、人間重視 戦略性 顧客志向 コスト意識 スピード、はこれからも自分の仕事上の指針として持って行きたいと思った。

講義「ストレスマネジメント」は、一言で言えば「異色の講義」であったと思う。性格気質を数タイプに分類し、その特質を知ること、人間関係を円滑にしていくという内容である。

「遺伝子が気質を決定する」や、カウンセリングの過程でどんどん時間を、進化すらも遡っていくという話などは、少々怪しい雰囲気を感じてしまったが、「相手が、性格としてできないような、相手に合わない期待はしない」ことや、「相手が好む方向に行動を持って行く」などのことは、納得がいく内容だった。

巷ではやっている性格分析と異なる点は、実践的で、すぐにでも自分で行動できる(できそ

うな) ところにある。初めは難病を抱えた患者のストレスケアのためのカウンセリング法開発から始まったそうだ。そのような特殊な状況対応が、一般化されていったという事もとても興味深かった。

ちなみに、図書館員はほとんどが「自閉気質」(たとえば所ジョージさんと言えば悪いイメージではないでしょう、と先生が説明していた。)の要素が多いのだそうである。

「自閉気質」は、「静か。表情は豊かに変化

しない。大きな反応はしない。お世辞を言えない。マイペース。独特な考えや雰囲気がある。ウソをつけない。だませない。人の話を聞いている風」だそうである。どうだろう、皆さんはあてはまるだろうか？

最後に、2週間もの長期の研修に出していただけたことに、関係各位に感謝申し上げます。特に係の方々には、私が不安なく研修に参加できるように気遣って仕事をいただきました。本当にありがとうございました。

(はんざわ・ともえ)

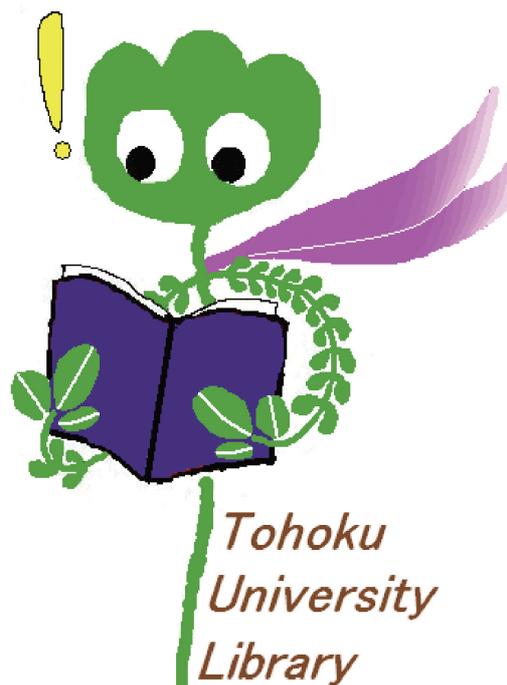
## 附属図書館のイメージキャラクターが決定しました

平成23年に創設百周年を迎える附属図書館では、百周年記念事業の一環として、当館のイメージキャラクターの公募を行い、その結果、応募多数の中から本学理学部3年の河村光晶氏の作品が最優秀作品に選ばれました。

9月19日(金)に附属図書館長室において、表

彰式が執り行われ、野家啓一館長から、製作者の河村光晶氏に賞状と記念品が贈呈されました。

採用された作品は東北大学の公式ロゴマークにも用いられている「萩」を題材にしたもので今後、当館のシンボルとして、さまざまな場面で用いられることとなります。



# 会 議

## 学 外

第63回東北地区大学図書館協議会総会の開催について

標記会議が、9月18日(木)いわき明星大学が当番館となり、同大学を会場として加盟36館から62名が参加し、次の協議題について意見交換を行った。

- 1) 平成19年度決算報告(案)について
- 2) 平成19年度記念事業基金決算報告(案)について
- 3) 平成19年度会計監査報告について
- 4) 東北地区大学図書館協議会の研修について
  - ・研修部会の設置について
- 5) 東北地区大学図書館協議会ウェブサイト運用部会の設置について
- 6) 東北地区大学図書館協議会誌第60号記念特集号について
- 7) 平成20年度合同研修会について
- 8) 平成20年度事業計画(案)について
- 9) 平成20年度予算(案)について
- 10) 平成20年度記念事業基金予算(案)について
- 11) 第64回総会の当番地区(館)について
- 12) その他
  - DRF地域ワークショップ(北海道・東北地区)開催への共催について

## 学 内

20. 7.15 平成20年度第3回附属図書館運営会議

- ・協議事項
  - 1) 附属図書館イメージ・キャラクターについて
  - 2) その他
    - ・報告事項
      - 1) 第55回国立大学図書館協会総会について
      - 2) 平成20年度第1回学術情報戦略会議について
      - 3) 平成20年度第1回学術情報整備検討委員会・第1回学術情報資料選定小委員会(合同会議)について
      - 4) 平成21年度概算要求事項について
      - 5) 平成20年度総長裁量経費について
      - 6) 学生用図書費について

7) 遡及入力について

8) 本館耐震改修工事について

9) 百周年記念刊行物について

10) Scopus について

11) TOUR について

12) サイエンスダイレクト・バックファイルの利用について

13) オープンキャンパスについて

14) その他

20. 9.22 平成20年度第4回附属図書館運営会議

・報告事項

1) 附属図書館耐震改修工事について

2) 第63回東北地区大学図書館協議会総会について

3) Science Direct について

4) Scopus について

5) TOUR について

6) その他

・3館構想及び事務一元化について

20. 7.23 平成20年度第2回附属図書館商議会

・協議事項

1) 附属図書館イメージ・キャラクターについて

2) その他

・報告事項

1) 第55回国立大学図書館協会総会について

2) 平成20年度第1回学術情報戦略会議について

3) 平成20年度第1回学術情報整備検討委員会・第1回学術情報資料選定小委員会(合同会議)について

4) 平成20年度川内地区図書委員会について

5) 平成21年度概算要求事項について

6) 平成20年度総長裁量経費について

7) 本館耐震改修工事について

8) 百周年記念刊行物について

9) Scopus について

10) TOUR について

11) サイエンスダイレクト・バックファイルの利用について

12) オープンキャンパスについて

13) その他

## 人 事 異 動

平成20年 9月30日現在

発令年月日	新 職	氏 名	旧 職	備 考
20. 7.31	事務補佐員（情報管理課図書情報係）	阿 部 郁 子	事務補佐員（情報管理課図書情報係）	辞 職
8. 1		阿 部 夏 恵		採 用
9.30		菅 原 育 子	再雇用職員（工学分館整理・運用係）	辞 職

## 編 集 後 記

「夏の日差し」と書こうとした時、「日差し」と書くか、「陽射し」と書くか、「ひざし」と書くか、はたまた「ヒザシ」と書くか、悩んだことはありませんか？

日本語はひとつの単語を様々な書き方で表現することが出来ます。そこには、どの漢字を使うかという選択や、漢字とかなの使い分けだけでなく、ひらがなとカタカナの使い分けという部分まであります。

「おにぎり」「オニギリ」「オにギリ」どれも少しずつ違う印象が感じられますね。本来表音文字であるはずののだが、2種類あることで表

意文字のような側面も持っているのは、日本語の特徴かもしれません。日本語の面白い所ではありますが、こうなると選択の幅が広くなり過ぎて悩んでしまいそうです。

読み手に自分の伝えたいことを上手く伝えるためには、どの表現を使えばいいか。書き手がそうやって無数の選択枝の中からひとつずつ選んできた言葉たちだと思えば、何気ない文章でも、書き手の気持ちがこもっているような気がしてきます。時にはそういった、言葉にこめられた意図を考えながら、文章を読んでもみるのもいいかもしれませんね。

東北大学附属図書館報「木這子」 第33巻第2号（通巻123号）発行日 平成20年9月30日

発行人 北村 明久 広報委員会委員長 加藤 信哉

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022-795-5911, FAX 022-795-5909

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>